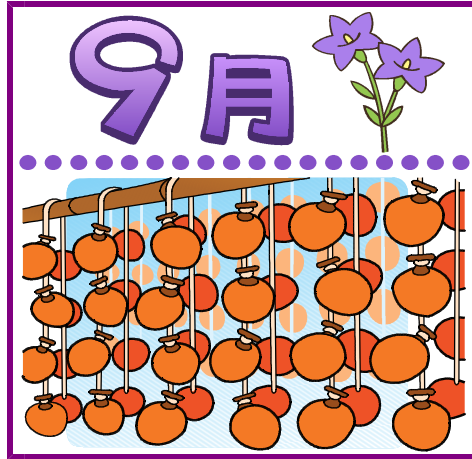


# めぐみイエス・キリスト教会

2022年9月11日(日)第二主日礼拝  
週報「通算第625号」



## 2022年標題聖句

### 第 I テモテへの手紙御6章17節～19節

《高慢にならず、頼りにならない富にではなく、むしろ、私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませて下さる神に望みを置き、善を行ない、立派な行ないに富み、惜しみなく施し、喜んで分け与え、来たるべき世において立派な土台となるものを自分自身のために蓄え、まことのいのちを得るように命じなさい。》

第一礼拝(教会にて) 毎週日曜日 午前10時～11時

第二礼拝※中止

聖書の学びと祈り会 毎週水曜日 午後6時～(各家庭にて)

牧師 鈴木 竜 実  
ますみ

※当教会は、モルモン教、エホバの証人(ものみの塔)、統一教会(原理福音)とは、一切関わりがありません。

## ◎礼拝プログラム

【前奏祈祷】

【賛美Ⅰ】 新聖歌259「聖いふみは教える」 p. 404

【交読文】 No.23 詩篇第66篇 p. 897

【賛美Ⅱ】 新聖歌486「雄々しくあれ」 p. 780

【使徒信条】

【主の祈り】

【先週説教】

【賛美Ⅲ】 オリジナル曲No.1「主と共にいつまでも」

【聖書朗読】 使徒の働き19章20節～22節

【礼拝説教】 《コリント教会の問題》

【聖餐式】

【賛美Ⅳ】 新聖歌165「栄光イエスにあれ」 p. 235

【平和祈り】

【頌 栄】 新聖歌63 「父・御子・御霊の」 p. 85

【祝祷後奏】

### ※聖書箇所 使徒の働き19章20節～22節(新約p. 274真中)

19:20 こうして、主の言葉は力強く広まり、勢いを得ていった。

19:21 これらのことがあった後、パウロは御霊に示され、マケドニアとアカイアを通過してエルサレムに行くことにした。そして、「私はそこに行ってから、ローマも見なければならぬ」と言った。

19:22 そこで、自分に仕えている者たちのうちの二人、テモテとエラストをマケドニアに遣わし、自分自身はなおしばらくアジアにとどまっていた。

### ●ポイント1. 「マケドニアとアカイアを通過してエルサレム」とは？

※使徒の働き16章11節～12節・17章1節・18章1節「第2回伝道旅行」

16:11 私たちはトロアスから船出して、サモトラケに直航し、翌日ネアポリスに着いた。

16:12 そこからピリピに行った。この町はマケドニアのこの地方の主要な町で、植民都市であった。私たちはこの町に数日滞在した。

17:1 パウロとシラスは、アンピポリスとアポロニアを通過して、テサロニケに行った。18:1 その後、パウロはアテネを去ってコリントに行った。

## ●ポイント2.「ローマを見なければならぬ」とは？

※ローマ書1章7節～10節「紀元56年コリントにて」 (新約p.297上段)

1:7 ローマにいるすべての、神に愛され、召された聖徒たちへ。私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたにありますように。

1:8 まず初めに、私はあなたがたすべてについて、イエス・キリストを通して私の神に感謝します。全世界であなたがたの信仰が語り伝えられているからです。

1:9 私が御子の福音を伝えつつ心から仕えている神が証して下さることですが、私は絶えずあなたがたのことを思い、

1:10 祈るときにはいつも、神のみ心によって、今度こそついに道が開かれ、何とかしてあなたがたのところに行けるようにと願っています。

## ●ポイント3.「テモテ」と「エラスト」は？

■**テモテ** 第2回伝道旅行において、同労者に選ばれた時は、テモテは20歳前後であった。彼は、パウロに同伴するだけでなく、パウロが去った後にもその地方に留まって働きを続けたり、パウロの代理または使者として派遣されたり、重要な任務と役割を担っていた。また、パウロの6通の書簡において、テモテは共同執筆者としてその名があげられている。パウロの殉教後も、テモテはその使命を忠実に果し、エペソ教会の初代監督として選ばれ、ドミティアヌス帝の迫害のもとで殉教したと伝えられる。

■**エラスト** 「最愛の」という意味である。パウロの助手の一人で、テモテと共にマケドニヤに遣わされた。また、テトスと共にコリントに送られたもう一人の兄弟も、このエラストである。後に、コリント市の収入役人となる。

## ◎先週の礼拝メッセージ【スケワの七人の息子たち】

《主イエスは、み言葉に伴うしるしとして、パウロを通して驚くべき御わざを成されました。この奇跡としるしを目の当たりに見ていた者たちがいたのです。それが「ユダヤの祭司長スケワの七人の息子たち」で、彼らは、パウロのしている事を見て、自分たちも試しにやったのです。「パウロの宣べ伝えているイエスによって、おまえたちに命じる。」

しかし、悪霊につかれた人は彼らに飛びかかり、押さえつけて打ち負かし、裸にし、傷を負わせました。この事件がエペソ中に知れ渡ると、エペソの人々は恐れを抱き、主イエスの御名をあがめるようになったのです。まったく、本当に何が幸いするのか分かりません。

さて、悪霊が七人の息子たちに語った言葉に注目しましょう。なぜなら、ここで問題になるのは、その人のアイデンティティーなのです。「イエスのことは知っている」

これは、主イエスがどのようなお方であるのかと言うことです。『悪霊どもも、「あなたこそ神の子です」と叫びながら、多くの人から出て行った。イエスは悪霊どもを叱って、ものを言うのをお許しにならなかった。イエスがキリストであることを、彼らが知っていたからである。』と、ルカはカペナウムの会堂で起こった出来事を書き記しています。「パウロのこともよく知っている。」

パウロが、キリストの僕であることを知っています。そして悪魔と悪霊どもは、私たちが救われた「神の子ども」であることも知っています。「しかし、おまえたちは何者だ。」

これは、「おまえたちに何の権威があるのか」という意味で、従う義務がないことを明白にしています。この時、彼らも「主の御名」を用いたのです。それにも関わらず、反撃にあったと言うことは、主の御名を用いる権威は、神の子どもたちだけにのみ、与えられているからです。》

### お知らせ

※9月18日(日)の第三主日礼拝は、午前10時からとなります。鈴木師は、9月19日(月)JTJ30周年記念礼拝にスタッフとして奉仕予定です。